



ひと夏の体験

先日、香々地青少年の家（豊後高田市）の「生き生きサマーキャンプ」という県内の小学生を対象とした活動を大学生と一緒にお手伝いしてきた。コロナ禍で大学生たちにとっても久しぶりの活動だっただけに、不安はマスク越しでも読み取れた。

参加してくれた小学生も同様だ。「知らない人とうまくやっていけるだろうか」と、彼らの心の声が聞こえてきそうな状況でこの取り組みが始まった。

当初は小学生、大学生とも慎重で、見ているこちらが苦しくなるほど会話が弾まない。大学生があの手この手で問い掛けても「うん」の一言で返す小学生。しかし無理もない話だ。私たち大人でも見ず知らずの人に対する反応となると近いものになるのと同様、相手を見極めているのだと思う。「この人はどういう人だろう。良い人か？ それ

とも悪い人か？」という具合に。

徐々に会話が成り立ち、弾み始めたのは夜の自由時間だ。「兄ちゃん、バイトしよんの？」「今コロナだからできないんよ」「じゃあ、俺と一緒にバイト探しちゃんけん、元気だしよ！」。こんなやり取りを聞いて、思うことがあった。最初は慎重に見定めなければいけないくらい見ず知らずの他人だが、プログラムの中でさまざまなサポートを受けた小学生は、きっと思ったのだ。この人のために自分にもできることはないかーと。この純粹な発想は人と深く関わり、助

けてもらう体験から生まれるのだろう。

他人から助けてもらう経験は恥ずかしいことではなく、将来的に他人を助けることへとつながる。そんなドラマがこの小さな取り組みでもたくさん見られた。彼らはきっと多くの人を助けるような優しい人になり、明るい未来を創ってくれるはずだ。私たち大人はそんな体験の場を守らなければならない。

たかみ・だいすけ 日本文理大人間力育成センター長。専門は初年次教育、ユースワーク、ボランティア論。別府市在住。41歳。